

駅と村々を結んだバス

わが能登川にバスがやってきたのは、大正9年(1920)に開業した愛知川の越溪自動車が始まりで、愛知川と能登川駅前を結びました。

そして、大正10年になると、能登川駅前に神崎自動車が開業し、駅前と南五個荘村金堂とを行き来しました。

昭和に入って神崎自動車は、林と猪子、山路と乙女浜を結ぶ路線をそれぞれ設け、能登川を走るバスは発展していきます。

また、昭和10年代には伊庭の古沢医院が駅と伊庭を結ぶ路線を自ら設け、住民に喜ばれました。当時はバスの

ことを乗合自動車と呼びましたが、いまのように皆気軽に乗る乗り物ではなく、本当に特別なときにしか利用しない贅沢なものでした。

このように小さな路線バス会社が存在しましたが、戦時中の交通統合によって、越溪自動車や神崎自動車は、近江バスに吸収されることになり、燃料不足の戦時中には、車両の後に木炭ガス発生炉を装着した木炭バスがモクモク煙を吐きながら走っていました。その木炭の匂いは、少年たちにとって何ともかぐわしい香りであったそうです。

近年、栗見出在家行きや夏の臨時であった新海行きの路線が廃止されましたが、まだまだ八日市行きをメインに、路線バスは活躍しています。



駅付近での交通安全教室(昭和47年)



十年ひと昔とはこのこと?(昭和62年)



伊庭大浜神社付近を走るボンネットバス(年代不詳)

西垣見^{すい どう}隧道^{ようしやう} 町内交通の要衝

西垣見隧道は、昭和51年(1976)3月1日に開通。立体交差工事着手は昭和49年10月1日からで、総工事費2億8205万8000円でした。立体交差ができるまでは、踏切を列車が通るたびに遮断機を手作業でおろす駅員が踏切番所に待機し、随時通行者の安全に務めてきました。

この隧道は現在大型車の通行はできませんが、あらたに駅東西の土地区画整理事業によって道路の拡幅ならびに地盤の掘り下げが計画されています。



工事着工前(上段・昭和49年)と現在の様子(下段・平成9年)

びわ湖よし笛^{びわこよしふエ}ロード

愛称「びわ湖よし笛ロード」の名で親しまれている大規模自転車道は県下初のスポーツ・レクリエーションを目的とした本格的な自転車道路です。

近江八幡市駅西の白鳥川を起点として安土町を通過、能登川町民体育館前までの延長26.2キロメートル(所要時間約3時間[7分/キロメートル])のこのコースは、昭和53年(1978)に工事着手し、9年の歳月と事業費約20億円をかけて昭和61年度に完成しました。

心地よい湖畔の風をうけながら、また山裾では木々にたわむれる小鳥のさえずりに耳を傾けながら、快適なサイクリングを楽しんでみてはいかがでしょうか。



びわ湖よし笛ロード開通の様子
(昭和62年8月8日)

乙女浜地先(左後方にカヌーランド)



きぬがさ山^{きぬがさ}トンネルの開通

より早く、より便利に

平成8年(1996)8月30日、五個荘町石馬寺地先で起工式が行われた「きぬがさ山トンネル」は平成10年3月の開通をめざして、現在建設中です。

この道路は県営きぬがさ山地区ふるさと農道緊急整備事業として幹線道路の整備に取り組んでいます。能登川と五個荘をトンネルで結ぶことにより、さらなる両町の交流促進、また農産物の流通拡大を図ろうとするもので、事業の完成により地域の東西交通は格段に改善されます。

さて、このきぬがさ山付近の通称「地獄越道」については、約120年も前に、ここを切り開き当時の須田村と当時の石馬村との往來を便利にして、広く地域の活性化を図ろうとする構想をもった人たちがいました。

この史実については、当時の南北須田村と石馬村などの住民48名が連署した「同盟本簿」という意見書(文書)が

町内北須田で最近発見されたことで明らかになりました。

私たちの先人も短時間で五個荘町と往來できる道がほしいという切実な願いをもっており、この願いは120年の時を経てかないつつあり、トンネルの完成で両町はもとより、広く地域の活性化が図られることとなります。



きぬがさ山トンネル工事(平成9年6月)